

あらゆる創造の根幹としての手

ライターズネットワーク代表

金丸弘美+文

text by Hiromi Kanamaru



la Main Souple



手は偉大なパフォーマーだ。手が語りかけたのは、チャーリー・チャプリンの数々のサイレント映画。手が踊り歌うのは、フレッド・アステアの華麗なるミュージカル。手は怒りでもあり、人の喜怒哀楽そのものだと教えたのは、ブルース・リーのカンフーだ。

映画の中の手は、まさに創造そのものに手があり、人そのものであり、あらゆる人の表現の根幹に手があることを教えてくれる。

さて、最近観た映画で、まさに手そのものがあつた。イタリアの实在の女流画家を主人公にした『アルテミシア』(1997)だ。

アルテミシアは、1593年に画家オラーツィオ・ロミの娘としてローマに生まれた。

彼女は画家として持ち前の好奇心と才能を開花させていく。彼女の絵は、いくつか現存し、歴史に残された最も初期の女流画家として、高く評価されている。

ここでは、ふんだんに手が出てくる。もちろん彼女が画家である以上、手は自己表現そのものであり、そして、それは人だけがもちうる、アートを創造する手でもあるのだ。

アルテミシアが生きた時代の背景は、ルネサンス期である。つまりは、あのミケランジェロやレオナルド・ダ・ヴィンチを誕生させた時代。

この時代はイタリアは美術家の宝庫だ。ゆうに300名以上の美術家たちが、美術誌に名前を連ねる。つまりは、人々が、まさに手によってつくり出した、世界的なあらゆる美術上の微細な精緻な、華麗な、さまざまな表現が出現した時代なのである。いや美術史上というよりも、人々の表現という行為のあらゆる可能性を示唆したともいえる。それは映画の連綿と繋がるクリエイションなのだ。

物語は1560年、ローマの修道院から始まる。アルテミシア (ヴァレンティナ・チェル



『アルテミシア』(1997)
(フランス・イタリア合作)
配給=エース・ピクチャーズ
監督・脚本=アニエス・メルレ
出演=ヴァレンティナ・チェルヴィ、
ミッシェル・セロー、ミキ・マノイロヴィッチ、
ルカ・ジంగాレッティ、エマニュエル・ドヴィオス、
フレデリック・ピエロ、モーリス・ガレル



L'origine d'esthetique

ヴィ)は、礼拝堂で、お祈りをした後に、そっと1本の蠟燭の炎を指でもみ消し、スカートの中へ隠して退散する。部屋に戻ってベッドに入るやいなや、上半身裸になって、鏡を持ち出してそれを片手で掲げ、もう1つの手で、デッサンをしていく。彼女は自分の体をモデルに、次々に絵を描く。

この絵が修道院僧の間で問題になる。修道院から、アルテミシアの父で画家のオラーツオ・ジェンティルスキ(ミッシェル・セロー)は呼びつけられるのだが、父は娘の非凡な才覚を見て、彼女を助手にする。

父オラーツオは、壁画や肖像画を描くことを仕事にしており、その腕は高く評価されている。父の仕事場で働くことになったアルテミシアだが、自分なりの表現をしたくて、好奇心はいっぱいだ。

アルテミシアは、あるとき浜辺に出て、岩影で、2人の男女がセックスをするのを目撃する。彼女は、その動作の一举一投足を食いるように見つめた。

浜辺でときどき会う幼なじみのフレビオが、自分に気があるのを知って、彼にキスを許すかわりに裸になってほしいと、交換条件を出す。

彼女は岩影でフレビオの裸体を両手で撫でるように触れ、筋肉のつき具合や骨の配置などをじっくりと観察し、それらをデッサンするのだ。

アルテミシアは、自分で描きためたデッサンを持って、父とともに絵の学校へ入学に向かう。

しかし、当時は女性の入会は認められない。アルテミシアの創作意欲は高まるばかりなのに、世間では迎える場がないのだ。

そんなときに、商業的に成功を取めた画家アグスティノー・タッシ(ミキ・マノイロヴィ

ッチ)がやってくる。彼は、室内で創られる絵画を、外に持ち出し、自然を取り入れる大胆な手法を試みていた。アルテミシアは、彼の手法に強く興味をひかれる。

タッシと父オラーツオが共同で壁画の仕事をする事になり、それがきっかけで、父はアルテミシアをタッシに弟子入りをさせ、絵画を学ばせようとする。

しかし、タッシとアルテミシアは恋仲となり、やがて父に知られることになる。激怒した父は、タッシを訴えることになる。裁判ではタッシは糾弾されることになる。やむなくタッシと別れたアルテミシアは、自分の独自の創造を目指すことになる。

彼女は一人、廃屋になったタッシの家に行き、そこから画架を持ち出すと、海の見える場所において、両手でこれから描くだろう絵の構図を示すのだった。

この『アルテミシア』には、さまざまな創造する手が登場する。アルテミシアとタッシが恋仲になったときのベッドシーンでは、彼女の手は彼を愛撫する手と同時に、男の体の構図を知ろうとする手

でもある。

タッシが彼女に外の世界を教えるときに持ち出すのは、糸が縦横に張られた画架だ。これを地に立てて、両手で外の世界をまさに包み込むように示して、絵に大地や海や空などを取り込む手法を伝える。

こうしてみると、手は神が人にもたらした、あらゆる創造の源だと知るのである。

